



故嶋 忠 一氏



工団連合会長、和商工業振興会会長、県中小企業団中央副会長、母体教育協会会長などを歴任。母体卒業後自家営業(織物)に従事したが昭和十二年支那事変に際し、企業整備により機械供出、工場は軍需に供せられるなど憂鬱の甚難を克服した。昭和四十二年四月勲三等旭日章を受賞。昭和四十八年九月十六日に終身和歌山市、葬儀は市内寺町無量光寺で挙行された。大正七年母校卒、昭和二十九年より和歌山織物加工協同組合理事長。現在まで和歌山商工会議所議員十一年和商同窓会の自宅で自遊されてゐる。

故北畠又右衛門氏



戦前滿洲石油株式会社(在任中)に赴き、から本市に引揚げられ、富士商會専務理事を歴任。和商同窓会といえは何をいっても馳せ参じた。初代理事長故酒井真次郎氏の女房役として活躍。現在の組織の基礎をつくった功績は極めて大である。昭和四十九年一月一日午前三時急病のため和歌山市中街町十番地の自宅で死去。七十二才。和歌山市出身。葬儀は市内男芝町吹上寺にて三日午後一時より挙行された。和商は大正九年卒、(茶道(表千家)と華道(嵯峨末生流)を自宅で教授されている。年卒、(十八期)。

大正中期と坂上町時代の和商

滝本 康夫 (18)



私達が坂の上町の和商に入社した大正八年は寺内閣を批評攻撃した大阪朝日事件で、長谷川如是、大山郁夫の二人が朝日を退社して政治雑誌「我等」を創刊し改造社が雑誌「我等」を創刊した年が第一回常展が開かれ郵便飛行が東京―大阪間を初めて飛んだ。松井須磨子が自殺し大阪市電のストで運搬手ら多数が高野山に籠城した。

故嶋さん

昭和十五年和商に赴任し、音に聞く尚商会の会合に招かれた。その翌酒井真次郎さんから、尚商に教頭をよんだのは、あなたが初めてだといわれ、この会には会則はない、若者をよんだことはなにか等々のお話を承り、会務の話合いが終って、酒宴に移ると、早速「あなたには長崎で三三ちゃん同期だぞう」と酒杯を交し、忽ち友情の愛語に解けておくれたのは嶋さんであった。

借別の情あらたに

甲子園に出場するや、他の各部も夫々日本一を目ざして、大いに勢を揚げたのであるが、荒木幸高見富貴等の相撲部も和商の伝統を再現しようと土俵を築き、練習を始めた。相撲部の選手として在学中活躍した嶋さん「わしは相撲部を育てる」と断言し陰に陽に力を尽され、遂に中尾三郎君を将とする相撲部を育て、大阪の全同大会では団体、個人の優勝を高くし、金沢、高知等の大会に行き、同行出来ぬ時には旅費の補充や、激励費を出し、慰労や祝賀に費用を惜まず、次々と後輩を育て、天下無敵の和商相撲部たらしめたのである。

熱燭やさも楽しげに握る盃(吐史)

両氏のご冥福を祈りて

内藤 俊彦

深く抑えて尽きない温情、責任感の強き尋常人に真似ることの出来なぬのがあった。又私とは初対面以来親友の如く、時には兄弟のような交わりを結んだ間柄であった。相撲部の選手として、誰にも相談することなく退職願を出したと聞かされた。しかし今日私が裁判所の教育委員であるのも、嶋さんが決して見捨てては置かれなかつた。ほんとうに頼りになる人であった。病室で聞いて病状を心配し、病室に先死に死んでくれるなど言えは、笑って答へたが、いまや呼べず、すがすがしい口管に御冥福を祈り上げます。

故北畠さん

大正九年三月十四期生として六十四名と共に和商を卒業し、更に神戸高商に学び、その後実業界に活躍したのであるが、あの第二次世界大戦とその敗戦は、わが国民にとって大変化をもたらしたものであった。

母校の和商生も遠く播磨造船に三、四年生、住友金高に五年生、由良浅に二年生が学生運動員、一年生は和商高(現和商経済学部)で学び、校舎は睡部から護国隊に占用せられ、校長としては生徒の動員先を慰問に激しく巡回しやせ細って眼だけ大きく光っていた。そして召集令状を受け東和歌山(現在和歌山駅)をたつ時、山崎(現在和歌山駅)をたつ時、男子として死所を得たりと思つたのであるが、敗戦となり、学制改革によりついに和商の名は消えてしまった。「あんな学校なんかどうなつてもかまわん」とある高宮君。

動乱の世相に処して...若い力いっぱい

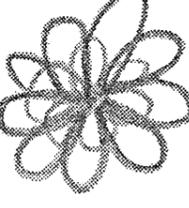
五回も六回も配達し追われ、この重労働が週間を続いたため私は病に倒れた。枯まき、籠の鳥の歌が流行したのもこの年である。翌十二年春卒業した。この当時、受験生七百五十人から八百人でそのうち百人が入学を許可された。現在の東大入試の狭き門であった。全校生徒五百名男子のみで冬服は黒、夏服は白制服、必ず背番号三三式兵銃を肩に、



校内点描 (左は体育館正面、右は中庭日時計)

嶋文庫誕生によせて

母校に生きる故嶋理事長のご遺志



教頭 小倉 勲

に、クラブ活動中興の功労者として忘れることのできない存在でもありました。時あたかも創立七十周年の記念の年を迎え、魅力ある商業学校作り、学校、関係者一同が覚悟を新たにする秋、氏を失ったことは誠に痛恨の極みであります。生涯、和商を愛し、育てて下さった氏、またこのたびのご遺志は校長はじめ教職員一同感謝のほかに、ご寄贈いただきました基金もあって、七十周年記念事業の一貫として嶋文庫を創設、永く氏の遺徳を偲ばせていただくことに衆議一決し、夫人の快諾も得ました。

嶋忠一氏の急逝によって、和商を支えてきた大きな柱の一本を失いました。大きな悲しみであり、深い嘆きの中での葬送の式も済んで一月たった日、嶋夫人が来訪され、故人の遺志として一〇万円を学校の何かの用に託し、寄贈下さいました。想えば、嶋氏は、昭和四十二年六月、同窓会理事長に就任され、以来六年余同窓生一五、六〇〇人の大世帯団結の中心となられ、また陰に陽に学校発展に努力され、体育後援会長としても、物心両面の援助を惜しまれませんでした。特に先の黒潮団体に和商があげた得点八十二点にみられるように、日本国語大辞典をはじめとす



